

# 名勝奥津溪の観光開発

秋になると色鮮やかな紅葉を見せしてくれる名勝「奥津溪」が国指定文化財に指定されたのは、昭和七年（一九三二）四月十九日のことで、今年が指定九〇周年になります。当時、奥津村から文部大臣へ提出された申請書には、

上には一面に紅花と燃え、夏の翠緑に河鹿のコーラス、さては秋の紅葉は川水に映じ美観壯観筆舌に盡し難く、冬はその河岸随所に温泉に浸りながら積雪を鑑賞する等、四季を通じて浴客観覧客等殺到している。

関西一の勝景として知られ、かつては頼山陽、田山花袋、乃木將軍等来歴され賞讃措かざる処であります。其の間には白淵の甌穴、天狗岩の奇岩、女窟の断崖、般若（寺）の大師堂、鮎返の瀧、石割の櫻、琴淵の深澤、井字の瀧の八景は、天下に冠たるもので、奇岩怪石の間に春はコブシ、石楠花、懸崖の

と書かれています。奥津溪がこのように人々に知られるようになったのは近代になってからのことで、江戸時代の『作陽誌』（元禄四年（一六九一）刊）には、  
碧巖聳抜して緑樹秀出し、天光雲影、山猿沙鳥は宛ら図画の如し、風烟常に趣あり  
と、その景色は賞賛されていますが、

当時はまだ人が足を踏み入れることがない深山幽谷の地でした。

明治時代になると津山―倉吉を結ぶ新たな陰陽連絡路の開発が計画され、大正三年（一九一四）奥津溪を通る県道（大釣線・大釣道）が開通しますが、この奥津溪の観光開発にいち早く着目した津山の実業家・浮田佐平は、大釣温泉一帯の土地を買収し、道路敷の土地を県に寄付する条件で、大釣線建設を県に働きかけたといえます。この陰陽連絡路の整備の過程と展望を明治三十八年（一九〇五）にまとめた「道報」には、

近き将来に於いて改築を要すべき大釣線の成功した暁には、千尋の大瀑布は恰も銀河九天落つるが如く、奇岩巨石は自然に画く様を呈し、見るもの壮快を感じざるはなし。文人墨客の節を茲に曳くもの春夏秋冬跡を絶たず。

高い評価を得て、冒頭の国指定名勝へつながっていくこととなります。

当時は近隣でも国指定文化財はほとんどなかったため、奥津村にとっては非常に名譽なことであり、奥津溪の知名度をさらに上げるきっかけになったでしょう。翌昭和八年には歌人・与謝野鉄幹・晶子夫妻も奥津溪を訪れ、その素晴らしい景観を歌に詠んでいます。

戦後になるとレジャーブームの到来により、昭和二十五年（一九五〇）から岡山―奥津間に急行バスが往来し、遠方からの集客がますます増大します。そして、昭和三十七年（一九六二）に公開された映画「秋津温泉」では奥津溪でラストシーンが撮影されました。岡田茉莉子演じるヒロインが桜の木の下で手首を切るシーンでは、ケヤキの木がスタッフによって桜の木に仕立てられて撮影されたというエピソードもあります。

近年ではCM撮影やライトアップなども行われ、指定後九〇年経った今でも変わらず景勝地として人々を魅了しています。

参考資料：『奥津町史』『作陽誌』『名勝奥津溪保存管理計画策定報告書』



名勝奥津溪



紅葉のライトアップ



映画「秋津温泉」撮影風景

と、大釣道開通後に奥津溪が観光地として注目されるであろうことを予想しています。陸軍大将・乃木希典が訪れた明治四十二年（一九〇九）は、まさにこの大釣線工事が着工される前夜のことでした。

大釣線の開通によって、奥津溪は奥津温泉と共に観光地として多くの人々が訪れ、

鏡野町教育委員会 生涯学習課 日下  
電話（0868）5417733